

## 24 手話通訳学科における手話通訳養成プログラムの再検討

(アメリカにおける養成プログラムとの比較から)

学院手話通訳学科 木村晴美・宮澤典子・市田泰弘・小菌江聡

### 1. はじめに

国立障害者リハビリテーションセンター学院・手話通訳学科は平成 2 年に、わが国で初めて手話通訳者を養成する教育機関として開設され、開設にあたっては、当時から先進的な通訳養成を行っていたアメリカの養成プログラムを参考にカリキュラムを組み立てた。学科開設から 20 年を経た昨年度末、アメリカの通訳養成現場視察の機会を得たことから、改めてアメリカにおける最新プログラムを参考に、手話通訳学科における養成プログラムの再検討に着手した。

### 2. 平成 22 年度カリキュラムへの導入

#### ・ディスコース発達に基づいた通訳トレーニングの導入

従来、通訳トレーニングでは、翻訳→逐次通訳→同時通訳というステップアップが定石であった。ところが、ボストンのノースイースタン大学では談話形式の発達に基づいた通訳トレーニングを展開している。談話形式は、会話→物語→説明→説得と発達するが、そもそも日本の学生は説明的談話、説得的談話が得意ではない。そこで、時事問題を解説し、そのテーマに対する自分の意見を手話で述べるという、説明的談話・説得的談話の力を伸ばすためのクラスを設けた。

#### ・デマンド・コントロール理論の導入

通訳モデルについてはさまざまな変遷があるが、最近では、通訳者が通訳現場を的確に把握し、その課題に適した対処をすべきであるというデマンド・コントロール理論が提唱されている。そこで、模擬通訳や通訳論の授業における実践的な通訳行動のトレーニングに加え、状況把握、的確な対処方法の判断、迅速な行動のトレーニングを強化した。

### 3. 今後に向けて

#### ・評価基準 (Rubrics) の導入

アメリカの大学における手話通訳養成コースでは、1-2 年次に徹底的に ASL を学習し、3 年次から通訳トレーニングが始まる。進級にあたって ASL 習得度のテストがある。テストは全米共通のもので、教師のみならず学生も自己評価に活用している。残念ながら、日本には同様の評価基準はない。また手話通訳学科においては各担当講師がクラス終了時に成績評価をするだけである。早急に、アメリカのような国内共通の評価基準を策定し、よりの確な評価をしていきたい。

#### ・IT 活用・遠隔教育の導入

通信技術の進歩は通訳養成にも大きく貢献し、デンバーのノースコロラド大学では IT 技術を活用した遠隔授業 (e ラーニング) が行われている。将来の手話通訳に対する質的需要の高まりを考えれば、通訳者のスキルアップは不可欠である。しかし、日本では当学科以外に十分な手話通訳教育を提供できる機関がない。全国的な手話通訳者のスキルアップのみならず、当学科の学生増につながるという観点からも、遠隔教育の導入を本格的に検討する必要がある。